慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	特集「老・病・死の社会学：「生きる意味」の在処」に寄せて
Sub Title	
Author	澤井, 敦(Sawai, Atsushi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2013
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.18 (2013. 7) ,p.1- 2
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：老・病・死の社会学：「生きる意味」の在処 目次のタイトル：特集「老・病・死の社会学」序言
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20130706-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特集「老・病・死の社会学―「生きる意味」の在処」に寄せて

澤井　敦

本特集は、2012 年 7 月 7 日に慶応義塾大学三田キャンパスで開催された、三田社会学会大会シンポジウム「老・病・死の社会学―「生きる意味」の在処」の、報告者 4 名と、コメンテーター2 名の皆さんにご寄稿いただいたものである。シンポジウムの趣旨として、報告者・コメンテーターの皆さんに（企画者である私から）あらかじめお知らせしたのは、以下のような内容である。

> 仏教で言う「生老病死」は「四苦」ということになっています。ただ、「老」・「病」・「死」に直面することが時として、何気なく「生」きる日常のかけがえのなさや、「生」きている一瞬一瞬の尊さや美しさをあらためて実感させ、再認識させてくれるということも、ごく一般的に語られていることであると思います。
>
> 2011 年 3 月 11 日の震災以降、悲惨な出来事の直接的・間接的な体験をつうじて、人々のあいだに、人と人の絆や、親密な他者との関係性を、あらためて見直そうとする傾向が現れてきていることもまた見てとれるかと思います。
>
> 以上のようなことなど念頭におきつつ、本シンポジウムでは、きわめて素朴な問いではありますが、「生きる意味とはなにか」という答えのないかもしれない問いを、老・病・死、とりわけその社会的側面が孕む問題性や可能性を考察することをつうじて、あらためて問いかけてみることを主旨としています。

当日の報告は、以下の 4 報告であった。

小倉康嗣：エイジングの再発見と「生きる意味」―第二の近代のなかで
皆吉淳平：脳死臓器移植問題における「社会」とは何か―「長期脳死」と「社会的合意」をめぐって
門林道子：がん闘病記にみる 5 つの語り―「闘病記の社会学的研究」から
鷹田佳典：個人化する悲嘆―医療現場における死別体験者の分断と共同

報告の後、大出春江、阪井裕一郎の両氏よりコメントをいただき、引き続き、報告者からのリプライ、質疑応答が行われた。当日の両氏からのコメントの内容は、たいへん充実した、かつ刺激的なものであり、それに対する各報告者からのリプライもさまざまな論点を含みつつ、

澤井敦「特集『老・病・死の社会学』序言」
『三田社会学』第 18 号（2013 年 7 月）1-2 頁

とても内容豊かなものとなった。それだけに、議論は予定時間を大きく超過し、司会者である私としては、一方でタイムキーパーとしては時間を制限しつつも、他方では報告者・コメンテーターの議論をもっと聞きたいと思う、というジレンマに苛まれる状況であった。

本特集は、こうした当日の議論をふまえて、また、当日の議論では時間の関係もあり十分に論じ尽くされなかった論点も含めて、報告者 4 名、コメンテーター2 名の皆さんにあらためて書き下ろしていただいた 6 つの論考からなる。報告者の皆さんの論考は、基本的には当日ご報告いただいた内容をベースとしたものだが、当日のコメントや討論を受けて（場合によっては、当日のコメントを受けてさらにそれに答え、議論を展開させるかたちで）、改変されたものとなっている。また、コメンテーターのお二人の論考も、当日の報告者からのリプライをふまえて、さらに議論を補完・展開させる、あるいは、議論の根底にある問題系を包括的にとらえ、整理しようとする試みとなっている。

特集全体の原稿をあらためて読み返してみて、企画者としてうれしく感じたことが二つある。第一に、「老」「病」「死」という根本的な生活体験、さらには「生きる意味の在処」という根底的な問題提起という、あまりにも直球であり、かつ、簡潔に論じることが非常に難しいテーマに対して、報告者・コメンテーターの皆さんが、真摯に向き合い、それぞれ深みと人間味（論じるその人自身を感じられるという意味で）のある、読み応えのある論考を寄せてくださったという点、しかもそれらの論考が、結果として、社会学という学問的地平においても強いインパクトを持ちうる成果となっている点である。そして第二に、この特集全体が、シンポジウムの時と同じように、いや、それ以上に、こうした根底的な問題を共有し、論じ合うための、いわば、コミュニケーション空間として現出しているという点である。もちろんそこでのコミュニケーションはまだ完結してはおらず、今後もまた形を変えながら継続していくものであることを、本特集はまた予感させてくれる。私自身、こうした空間の一参加者となれたことを、とても幸いに感じている。

最後になるが、あらためて、ご寄稿いただいた報告者・コメンテーターの皆さん、また、シンポジウム当日にご参加いただいた皆さまに感謝の言葉を申し述べたい。

（さわい　あつし　慶應義塾大学法学部）